

テイヤール・ドシヤルダン奨学金

2006年度 懸賞応募論文

論文課題：「私の研究と Quality of Life: NGO を活動空間としたカダザンドゥスンの生活戦略」

学生番号： B0563013

氏名： 竹村 有未 (外国語学研究科・地域研究専攻)

要約： 本論文では、私が研究対象としているマレーシア・サバ州に暮らすカダザンドゥスンの生活戦略を自ら設立した NGO の設立経緯および現在の活動内容をもとに説明し、「私の研究」と彼らの QOL の関係を明らかにしたものである。マレーシア加入の段階で、州における優位民族でありながらも、国民国家の中で周縁化されてしまったカダザンドゥスンが、いかに自らの QOL を獲得するためには、自らが「先住民」としてのアイデンティティを持ったサバ固有のエスニック・グループであると明瞭化する必要があった。獲得したアイデンティティをもとに、コミュニティを強化し、土地に根ざしながらも「開発」から取り残されないように NGO の資金を獲得し活動を継続していくことが必要だったからである。

州全土の約 12%がプランテーション化によって、彼らの土地でなくなっている状況のなかで、彼らの QOL とは近代化およびグローバル化による生活の変化から取り残されないこと、その土地に根ざした暮らしを続けられる環境を維持することを意味する。そのような状況にある彼らを研究対象にするということは、当然現地へのコミットメントが要求される。地域研究者として私が出来ることとは何か。それは、彼らの QOL を理解する枠組みを提供することである。同じ時空間を共に生きるものとして、民族誌の作成を通して彼らの抱える悩みおよびダイナミクスを伝えるのである。

「私の研究と Quality of Life: NGO を活動空間としたカダザンドゥスンの生活戦略」

1. はじめに

人類学を主体とする地域研究者の役割とは、他者の暮らす生活領域で起こっている事象に対して理解の枠組みを提供することである。しかし、自己の影響を極力抑え、その土地に暮らす人々を一方的に「他者」と位置づけ、記録するだけの民族誌作成だけに努める時代は終焉を迎えている。研究対象となっている地域の多くは発展途上国であり、フィールドワークを行えば、その土地に暮らすがゆえに抱える人びとの苦悩を垣間見ることとなる。一定期間を地域で暮らすことで、その土地に暮らす人びとと時空間を共有し、正面から向き合う。そして「研究者」としての自己と「隣人」としての自己が同居していることに気づく。したがって、現在の地域研究者には人びとが直面する問題や苦悩を含めた地域の実情を研究したものを外に発信すると同時に、現地への積極的なコミットメントが要求されているのである。

また、地域に関することを研究するならば、その地域で行なわれている開発行為および過程に対して無知ではいられない。グローバル化との相互作用により、地域の習慣や事情は凄まじい勢いで変化している。近年では、先進国の援助団体が途上国でさまざまな開発行為に関与してゆくなかで、その開発行為をいかに地域の人びとが巻き込まれているのかに関心が集まっている。さらには、開発過程や開発に関わる人びとに着目し、開発や NGO などの空間に生きる人びとが研究対象として取り上げられるようになった。私もそのような開発行為に着目する研究者のうちの 1 人である。

日本から直行便で約 6 時間、ボルネオ島北部に位置するマレーシア・サバ州の州都コタキナバルに到着する。私が研究対象としているサバ州の先住民、カダザンドゥスンの人びとが暮している。彼らにとってカダザンドゥスンとして生活できる権利を示す Quality of Life(QOL)とは、2つを意味している。1つ目は、近代化およびグローバル化による生活の変化から取り残されないこと。そして2つ目は、その土地に根ざした暮らしを続けられる環境を維持することである。双方のうち1つでも欠けてしまえば、彼らの QOL は成立しないこととなる。QOL 獲得のために彼らが選んだ道は、戦略的に「先住民」としてのアイデンティティを獲得し、それに依拠した NGO 活動を展開してゆくことであった。以下、本論文では、カダザンドゥスンの生活戦略をマレーシア・サバ州の先住民が自ら設立した NGO の設立経緯および現在の活動内容をもとに説明し、「私の研究」と彼らの QOL の関係を明らかにしたい。

2. マレーシア・サバ州の人びと

従来、マレーシアの民族構成は土着のエスニック・グループであるマレー系と移民の中華系、インド系の 3 民族によって構成されているとの説明がなされてきた。しかし、マレーシアにはマレー系以外にも数多くの土着のエスニック・グループが存在する。特にボルネオ島に位置するサバ・サラワク州は、半島マレーシアとは異なった歴史・文化背景を抱えるため民族構成も複雑さを極めている。彼らは、広義の範疇ではプロトマレー系には属するものの、半島におけるマレー系とは明らかに違う文化的習慣を持ち合わせ、ボルネオにおける先住民とみなされている。

連邦国家の中で2番目の面積を占めるサバ州の場合、50以上のエスニック・グループが存在しており、そのうち39グループが州に土着のグループである。260万人の人口のうち60%が先住民グループに属し、大まかに非ムスリム系先住民であるカダザンドゥスンとムルト、ムスリム系先住民であるバジャウに分けられる。非ムスリム系先住民の多くは内陸部に住み、今でも伝統的な焼畑農業などを行い自給自足の生活を送っている人びともいる。一方、ムスリム系先住民であるバジャウは海岸部に暮らし、隣国であるフィリピンやインドネシアとの繋がりが深い。サバにおける「先住民」を定義する場合、非ムスリム系およびムスリム系両方のグループを指す。しかし、一部の非ムスリム系先住民は、ムスリム系の先住民は比較的近年になってフィリピンやインドネシアから移民したグループであり同義的に語れないとしている。(Luping: 1994)

1963年9月のマレーシア加入後、サバの人びとは国民国家の枠組みの中に編入することにより生活の劇的な変化を経験することとなる。加入時に獲得した20項目にわたる文化的自治権は、州内の権力争いによって形骸化の一途をたどることとなり、国家の中で周縁に追いやられて行ったのである。この原因を山本は、数多くのエスニック・グループが存在するためナショナリストがネイションを想像するのが困難であったと指摘している。(山本: 2006) 60年代は、州最大のエスニック・グループであるカダザンドゥスは「カダザン」なのか「ドゥスン」なのかと民族呼称をテーマに誰が主導権を握るかで対立し、「カダザンナショナリズムの興亡」として語られてきた。(Roff: 1969)

そして国の優位民族であるマレー系に近いバジャウ系が州の政権を握ることで、一気にマレー化が進んだ。「1つの言語、1つの文化、1つの宗教」ポリシーが打ち立てられ、いつしかイスラームが州教となり、英語教育もマレー語教育へと変更になり、半島を中心とした世界の中に組み込まれて行った。しかし、連邦国家のシステムの中には組み込まれていくものの、経済的な恩恵にあずかることは少なかった。電気・水道・電話線などの基本的な生活基盤は一向に整わないままである。さらには、文化的自治のみならず国家資源に対する権利の獲得にも失敗する結果を招いたのである。イスラーム化と貧困が問題に上がり、その問題の渦中にいたのは州の優位民族であるはずのカダザンドゥスンであった。生活危機、アイデンティティの危機、立場の周縁化に悩まされ続けているのである。

3. サバにおける市民社会の誕生

マレーシア加入以後、半島マレーシアよりも経済成長が進まないサバではあるが、1970年代には豊かな資源をもとにした貿易により緩やかな経済成長を経験していた。サバ州は豊富な材木資源を利用し、森林伐採の利益によりサバ財団を設立した。森林伐採権を売ることにより発生した利益を財団に集め、奨学金を提供する仕組みである。それは先住民社会にもある程度の恩恵をもたらした。就学機会を拡大し、先住民の大学卒業生数が増えるなどインテリ層を生み出したのである。しかしその後、80年代に入ると経済成長が停滞し、インテリ層の就職先が限定されるものとなった。さらには、マレー化現象が顕著に見られるようになり、行き場を失った彼らは社会的な運動を起こしていくこととなったのである。

(Loh: 1992) 大学を卒業しているインテリ層などは、政治的な運動に取り組み、ムスリム中心の政党が有利な Berjaya 政権からエスニック・グループの枠組みを超え、サバを革新することを目的とした PBS 政権を誕生させた。

一方で、若者を中心に学生運動も組織されるようになった。1980年代前半にマレー半島にあるマレーシア国民大学（UKM）やマラヤ大学（UM）で学んでいたサバ出身の大学生は、サバにおけるイスラーム化と貧困問題を危惧し、学生運動を起こしてゆく。現在サバで活動する NGO である Partners of Community Organisation (PACOS)の前身である Sabah Christian Movement (SCM)の誕生である。当初の活動内容は、現状を理解するために聖書やマルクス主義などを勉強することおよび、サバ内で貧困地区に滞在し現状を知る Sabah Camp を行うことであった。また、裁判なしに不当な拘留を可能にする国内治安維持法（ISA）を行使し、運動を規制してゆくことに対する抗議活動なども平行して行われた。

しかし、当時からのメンバーであり、PACOS 設立で中心的な役割を果たした Jannie Lasimbang は、当時を「間違った方向にあり、活動そのものを理解するのが困難だった」と振り返っている。貧困に直面する農村を助けなければとは考えていても、自らの生活を優先させる考え方や、近代化など大学で学んだ知識のみを生かそうとする考え方に納得出来なかったのである。彼らの中には、イスラームに対抗したキリスト教化が強かった時期に中高生時代を送り「先住民」としての伝統を維持してゆくことと近代化のはざまでのジレンマを経験したものもいた。当時は、キリスト教を受け入れながらも先住民としての習慣を続けることは困難であった。そのため、そのような経験が普遍的な考えのみを追うのではなく、自らの暮らしにあった貧困からの脱出の可能性を探る道へとグループの一部を導いたのである。

彼らは、サバ開発問題研究所（IDS）からの資金提供をもとに、最も貧困率の高いといわれているピタス地区で 87 年から Poverty Study を開始した。今までに訪れたことのない地区を訪問し、食べるのがやつの生活をしている人びとを目の辺りに、現状を理解すると共に何が本当に求められているのかを考え始めたのである。その結果、サバにおける現状を理解し、コミュニティを援助する目的で、Project on Awareness of Community in Sabah を始めた。自分達で問題に取り組み、政治が不安定な中で政府主導の開発に頼るのではなく、自らでコミュニティを強化し、自らが望む開発とはいかなるものかを見出していく第一歩であった。

その後、タンブンナン地区にあるコミュニティで起こったプランテーション開発問題に取り組んでいくこととなる。政府の定める土地法により、先祖代々の土地を失う先住民の状況を、土地法を含めて勉強していく中で、自らの暮らしやアイデンティティがいかに土地に根ざしているものに気付いてゆくのである。プランテーション反対運動のなかで、彼らのなかにある「先住民」としてのアイデンティティが明瞭化され、活動の基礎が形成されていったのである。さらに 1989 年には、抗議活動および国際的な支援を求めるために、ピープルズ・プラン・21 世紀が主催した世界先住民族会議（International Indigenous Peoples' Conference）にマレーシア代表として参加する。そこで彼らは、「表面的な知識や経験を教えこむことでなく、先住民族の持つ素晴らしい技術、文化、知恵といったものを伝えていくということ」や「何世代にもわたって、自分たちのものであった土地を、自ら管理できるよう求めています。私たち自身に直接利益のある経済形態を求めています。さらに、私たちの文化や伝統が尊重されること」の重要性を訴えて行った。

その後、プランテーション化や森林伐採などに関連した土地問題に悩むコミュニティでの Community Organisation に力を入れてゆくこととなる。西海岸から始まった活動は、次

第に内陸部や北部、さらにはムスリムが多い東海岸にまでに広がった。1994年に信託法による信託団体として登録申請の準備を開始し、97年に申請許可が下りた。サバにおける先住民の暮らしをコミュニティに重点を置きながら向上させることを目的に活動する NGO、Partners of Community Organisation がサバの市民社会に誕生である。

4. 生活戦略としての NGO の形成

「先住民」の権利を主張する社会運動は、ラテンアメリカを中心に 1970 年代から起こり、「世界の先住民の国際 10 年」として 1994 年、国連において宣言されるなど世界的な展開を見せた。私が事例としているマレーシア・サバ州でも、この運動の影響なしには先住民 NGO は成立しなかったであろう。周縁化を憂い、自らの地位および生活水準の向上を目指す NGO にとって、世界的な展開を見せる先住民に関する社会的運動の存在は、NGO の方向性を決める上で重要な要因となった。つまり、「先住民」としてのアイデンティティは他国の国際協力団体等から援助を引き出す上で重要視されることとなったのである。

現在、サバの一部の農村では、近代化政策が行き届きにくい農村部に暮らす人びとにとって、NGO 主導の村落開発は行政サービスを補填する役割を果たしており、生活戦略として成立しつつある。そのため、他国の国際協力団体の援助方針を理解し、村落開発を担当していく NGO の存在は必要不可欠である。サバにおいて、「先住民」としての権利を主張することを戦略とした NGO 活動が醸成するには、植民地時代の遺産である英語教育を受けたエリート層が、重要な役割を果たしている。彼らが媒体となることで、他国の援助団体との交渉や各国の先住民運動を担う NGO とのネットワーク構築が可能となった。地理的、歴史的条件下から内陸部と都市部に居住する人びとの経済・教育格差が激しいサバ州内において、このような NGO 職員の存在および、各村落と NGO を往復し連絡役を務める人びとが NGO 活動を支えている。

村落の代表として NGO との連絡役を担う養成を受けた人びとは「コミュニティ・オーガナイザー (CO)」と呼ばれ、NGO 主導の村落開発における窓口の役割を果たす。CO は、自らの村落を「開発」すべく、NGO と村落の調整役として双方の要求に応えられるように拠点を往復する生活を送っている。世界レベルでの社会運動を基点とした「開発」事業が村落に導入されるには、このような 2 つのレベルでの媒介者が必要となり、「先住民」のための NGO 活動の位置づけをつくりあげている。

5. QOL と私の研究

では一体、彼らの QOL の獲得と私の研究の関係性はいかなるものであろうか。

私がサバの人びとの暮らしに惹かれ、修士課程にまで進んだのは、おそらく PACOS (Partners of Community Organisations) との出会いが印象的であったからであろう。PACOS に関わる人びとの中では、流暢な英語を操り、コンピューター操作に慣れ、UNDP のような国際機関で交渉するなど「グローバル的」だと私が考える側面と、自らのことばをしゃべり、その土地で作られたお酒をみなで酌み交わし、家族の絆を大切にするなど近代化やグローバル化によって失わざるを得ないと考える側面が矛盾することなく同居している。この不思議な光景のもと、そして先にあるものを探りたいというのがおそらく最初の研究動機だったのであろう。

しかし、彼らの活動のみでサバ州の70%を占める農村部にいる人たちの暮らしが早急に向上するわけではない。サバ州全土の12%は、商業目的のプランテーションに使用されている。多くの村は土地問題を抱え、プランテーションと隣り合わせの暮らしをしている。サバ州北部のアカシア・プランテーションの中にある村に滞在させてもらった際、夕飯が家族4人に対し、目玉焼き2つのみだったことに非常にショックを受けたことがある。外来種であるアカシアの植林が80年代前半に始まり、今では自生するようになった。従来の植生はアカシアにとって変わり、野菜が育たない土壌へと変化していったのである。さらに過酷な土地では川が枯渇し、魚も採れなくなっていった。薬草は見つからず、昔話をする目安の木々や土地の風景は消えうせて行った。その土地にあるべきものがない、採れるべきものが採れないことは、自らの習慣や伝統をもはや維持できないことを意味している。土地への愛着を失った若い世代は都市へと移動し、土地に根ざした暮らしを辞めていく。アカシアが人びとの日々の糧を奪っていくスピードはPACOSが活動を展開していくスピードよりも速い。

目玉焼きのみの夕飯を目の前に、私は自問した。私が研究することの意義とは何であろうか。貴重な夕飯を分けてもらっている私の役割とは何であろうかと。彼らを取り巻く環境を抗議活動などによって、一気に国際的な注目を集めさせ解決させることなどは、私には出来ない。私ができることは、研究を通して同時代を共に生きるものとして彼らが抱えている問題に微力ながら共に向き合うことである。地域で起こっている多種多様な変化を粒さに捉え、「他者」としての視点を提供する。そしてそれを「外の世界」に理解の手段として発信する。それが今の私に出来る現地へのコミットメントである。

つまり彼らが自らのQOLをいかに見出し、またそれに対していかなる行動を起こしているのかを理解し、伝えていく事そのものが私の研究なのである。「先住民」として生きる道を選んだカダザンドゥスンの人びとにとって、QOLとはサバの土地に根ざした生活をグローバル化によってもたらされた援助や技術を利用しつつ維持してゆくことである。そのために彼らが今まで取り組んできたことを民族誌として作成することを通して、理解の枠組みを「外の世界」に発信し、よりよい生活に対する改善策を見つけ出す一つの手助けになれば「私の研究」が地域への還元になるのではないだろうか。

6. むすびにかえて

フィリピン・ピナツボ山の噴火により生活が激変してしまったアエタを研究する清水は、人類学者の役割を、「現実の問題の解決や改善のために積極的に介入し関与した上で、さまざまな矛盾や葛藤や利害対立をはらんでダイナミックに変動する現代世界の断片の民族誌の作成を模索すべきである」と語った。(清水：2003)

もし私が民族誌を作成することで、彼らの暮らしの断片を理解する枠組みを提供できたなら、彼ら更なるQOLの獲得に少なからず貢献できることになるのではないだろうか。サバにおける暮らしは決して楽ではない。しかしその現状を無気力に受け止めるのではなく、カダザンドゥスンの人びとは様々な可能性にかけている。そのダイナミクスにこそ、彼らがQOLを獲得しようとしている力強さが現れている。「私の研究」と「QOL」はそのダイナミクスを「外の世界」に発信し、同じ時空間を共に生きるものとして思いを少しでも馳せる手立てとなる論文を提供してゆくことで関係性が持てると考えている。

参考文献

清水展 (2003) 『噴火のこだま: ピナトゥボ・アエタの被災と新生をめぐる文化・開発・NGO』 九州大学出版会.

山本博之 (2006) 『脱植民地化とナショナリズム—英領北ボルネオにおける民族形成』 東京大学出版会.

Institute for Development Studies (Sabah) (1987) "Poverty Study in Sabah: Phase One the Kudat Division," Draft Report April 1987, Kota Kinabalu.

Loh Kok Wah Francis (1992) "Modernization, cultural revival and counter-hegemony: The Kadazans of Sabah in the 1980s", in Joel S. Kahn and Francis Loh Kok Wah (eds.) *Fragmented Vision: Culture and Politics in Contemporary Malaysia*, Honolulu: University Hawaii Press, pp.225-53.

Luping, Datuk Herman J. (1994) *Sabah's Dilemma: the Political History of Sabah, 1960-1994*, Kuala Lumpur: Magnus Books.

Roff, Margaret C. (1969) "The Rise and Demise of Kadazan Nationalism", *Journal of Southeast Asian History*, Vol. 10, 326-343.